

合唱団ホームページアドレス <http://www.wiengifu.org>

音楽とは 横への感性なり!

12 月号

2019年12月1日
編集・発行/
ウィーン岐阜合唱団

「飛驒・高山千人の第九」を感動の第九演奏会に!!



11月9日(土)平光先生の一之宮公民館での指導風景

飛驒高山千人の第九実行委員長 中村 隆夫

飛驒地区では2回平光先生のご指導を戴きました。その情熱的で、会場を揺るがすばかりの迫力に、会員はすぐに引き込まれて行きました。何より驚くのは、素人合唱団員への**わかりやすい指導と団員を引き込む指揮**の凄さでした。「圧倒された」「凄い迫力だけど楽しい」…、練習時間は瞬く間に過ぎて行きました。

私は長年音楽教師を務め、いつも「音楽の好きな生徒と嫌いな生徒」に両立すべき音楽の授業を大切にしてきました。まさに**平光先生はプロもアマも教えられる指導者**だということです。こういう指導者こそ今回の第九には必要でした。

◆岐阜はウイーン、高山をザルツブルクに

今回の飛驒の演奏会は、岐阜をウイーンの如くにと名付けられたウィーン岐阜合唱団との共催によって実現しました。私は飛驒高山をザルツブルクにたとえ、美濃と飛驒がひとつになった意味の大きさを感じています。さらに、岐阜県内のみならず、福井県敦賀第九の会、東京都みな月の会、石川県氷見第九の会、千葉県、長野県からの参加者も加え、全国的な広がりもあります。

プロとアマが一つになって創り出す飛驒高山千人の第九演奏会!! 演奏者が涙し感動出来る第九にしたのです。来訪心よりお待ちしております。

ウィーン岐阜合唱団の皆様、平光保先生、飛驒高山千人の第九の共催ならびに大挙しての協力・協賛出演、実行委員会を代表して心より御礼申し上げます。

飛驒では高山市民文化会館オープン（昭和57年11月）以来、37年目の第九演奏会「飛驒高山2019千人の第九」開催まであとわずかとなりました。構想から3年、いよいよ現実となります。飛驒高山では本番に向けて熱い練習が続く、ウィーン岐阜合唱団と共に歌えることに大きな期待を持ち頑張っています。

◆「ベートーベン先生」と仰ぐ平光保マエストロ

第九の指揮が出来る指揮者は何人もいますが、これ程までに第九に心奪われた指揮者を私は見たことがありません。**平光氏には第九の全てが詰まっている**のです。その情熱的な指揮は、ベートーベン自身がそこにあるかのようです。

垂井町音楽祭 `合唱の部`に出演しました 岐阜本部 アルト 山田秀子

11月24日の日曜日、垂井町文化会館大ホールにて行われた第28回垂井音楽祭にウィーン岐阜合唱団から51名が参加しました。

プログラム第一部「第九」を歌おう!には、平光先生の指揮、菅原先生のピアノ伴奏バージョンでの第九演奏です。今年入団した団員さんも数名が参加し、12月の年末の定期演奏会の一足先に団員として登壇されました。単独の合唱発表では、フィンランディア・ナブッコ・大地讃頌を演奏し、うれしいことに、「先輩の団員さんから場数を踏んでおいたほうがいいよというアドバイスを受けたので参加しました」とおっしゃっていました。

第九の参加者は、垂井町でコーラスグループに入っている人や、地元の中学生、個人で申し込まれた人も交わり、総勢約65名の構成です。音楽祭の冒頭は、平光先生の指揮で第九の合唱から始まるというわけです。今年で28回目というこの垂井町音楽祭、私たちが参加した合唱の部は、町内からの参加者を中心に今年は保育園児や中学生の参加も加わり、いつもより観客席は賑やかだったような気がしました。

演奏会を終え思ったことは、皆さん歌を歌うことが好き! 私たちももちろん歌うことが大好きです。そしてプラス、ハイクラスの合唱をめざしているということ。私たちの合唱で、たくさんのお客様に喜んでもらうという高い目標があるのだとあらためて感じました。参加された皆様、お疲れさまでした!



錦秋愛でる白山と 伽藍に響く歓喜の歌



岐阜本部 ソプラノ 新田ひとみ

野山がにぎやかな色に染まり、深まる秋を感じるころ、ウィーン岐阜合唱団秋の紅葉ツアーに参加しました。

行き先は「南越前・花はす温泉と白山ホワイトロード・若狭」一泊二日のバス旅行。

大垣と岐阜から観光バスに乗り、和気あいあいのなか総勢29人で出発です。

平光先生や伴先生から、今旅行のお楽しみ処をお話いただき、早くも期待がふくらみます。

バスは白山白川郷ホワイトロードを通り、一路白山展望台・ふくべの滝を目指します。

ここは、北陸屈指の紅葉の名所であり、霊峰白山を拝む山岳絶景ドライブロードです。

車窓に広がる綾錦の山々。雲海を従え見え隠れするその様は、艶やかな友禅染のように息をのむ美しさです。

勇壮な岩肌とのコントラストや、七本の滝とのコラボレーションは本当に見事で、あちこちから歓声が上がります。

今が盛りの紅葉絵巻に後ろ髪を引かれながら、昼食場所の一里野高原ホテル“ろあん”に進みます。

ここが一番人気は、地物にこだわった炭火料理。優しい火の灯る囲炉裏を囲みながら、和やかな食事に、ほっこりとした時間を楽しみました。

心もお腹も満たされ、次に向かったのは福井県立恐竜博物館です。

銀色に光るドームの内部には、44体もの恐竜骨格や標本・大型復元ジオラマが展示されています。

巨大な恐竜たちに歓迎され、少年のような瞳でロマンと不思議を体験しました。

興奮冷めやらぬなか、今日の宿泊場所である、花はす温泉・そまやま荘に到着です。

夜には南越前町の混声合唱団四季との、音楽交流会がありました。

ここには、我が団の演奏会に何度も登壇されている澤崎さんが、所属されています。

平光先生とも長年親睦があり、お仲間と一緒に駆けつ

けてこられました。

久々の再会に喜びながら、まずは四季の「ヘッドライト・テールライト」で幕開けです。

福井県在住のヴァイオリニスト大久保ナオミさんは、お得意の「ザ・クンパルシータ」を演奏されました。小柄な体からほとぼしるエネルギッシュな表現に、ブラボー！と拍手がやみません。

私たちは、皆さんの熱い視線を全身に感じながら、「ナブッコ・大地讃頌・フィンランディア」を歌いました。

伴先生は、「サムソンとデリラ」「母さま」(平光保作曲)などを熱唱されました。込み上げるような情感と、それに寄り添うピアノのささやき。

いつもながらに平光先生と息の合った演奏に、誰もが魅了されました。

歌に酔い美酒に酔い、最高の友とワイワイ盛り上がった至福の宴でした。

温泉で疲れを癒した翌日は、まさに歓喜晴れ！歓喜寺で歌われている「歓喜寺の四季」は、菅原先生がアレンジされ、素敵な合唱曲になりました。本邦初演の感激を皆で味わいました。

さらに伴先生の独唱は、荘厳な本堂が醸し出す唯一無二の演出と相まって、五感を捉えます。

そしてこの旅行の最大の目的。“歓喜寺で歓喜の歌を歌おう”を合言葉に、思いを馳せた平光先生の夢が実現したのです。

そこに身を置く幸せは、偶然ではない必然の巡り合わせかと、一期一会のご縁に一同合掌です。

平光先生の魔法の指先に操られ、第九合唱が黄金の伽藍に高らかと響いていきます。

人類皆兄弟。喜びと平和の祈りは、帰路につく三方五湖の湖面を、静かに揺らしていました。

格天井をも突き抜けた歓喜の歌は、私たちの脳裏に留まり、「長良川国際会議場 さらさーら」の舞台で鮮やかによみがえるに違いありません。この経験を一生の宝とし、令和初となる記念すべき第九演奏会の感動を、観客の皆様に届けたいと思います。

定年後 10 年生の自慢話

岐阜テノール 竹中千尋

私、定年後 10 年たちます。ウィーン岐阜合唱団に入団して 9 年目を迎えています。入団直後『定年後の 1 年生』と題して投稿してから 7 度目の投稿となります。で特に書くネタがありません。どうしたらいいでしょう。坪内ゴッドマザーのプレッシャーは強烈です。8 年前より強力になっています。で絞り出して書きます。

私、音楽特に合唱について蘊蓄を述べるほど知識と実力がありません。でこの 8 年間のウィーンでの経験とレベルアップしたと思われる事象を記載することにしました興味のある方はお読みください、ない方は・・・してください。

一生縁がないと思っていた合唱、「3000人第九行ってみない」とかみさん。「アア」といつものように生返事。当日何も持たずに会場へ エッ楽譜がいる いきなりMの合唱

これはダメだ 隣のソプラノさん楽譜見てない なってこった 隣のおじさんすごい声

カルチャーショック うなだれて帰宅の途中 『CDがいる！』 戻ってCD予約。

そこから始まった3000人の第九、どうにか乗り越えました。次は欲が出ました。

もう一度！どこかで！ 新聞記事はタイムリーでした。『ウィーン岐阜合唱団 年末第九へ向けて練習始まる』早速電話しました。

「「ホー」じゃないです「フォー」です」「かつてにつくって歌わない・」「今落ちた人の中に犯人はいます」的確です。全てバレてます。ときどき「そこから先は大変お上手」「ハレルヤはよく晴れてます」 K子先生素晴らしい素敵です。

「ここは朗々と」「ここは厳かに」「次に句点がありますね」全てが頭の中に・・・？自動的に？反射的に？自然に？努力では出来ない！ Dai先生大きな心を感じます。

「b b b b bこれは〇〇短調 わからないですか？」 単調？こんなにbついてるのに？私には信じられないことばかり『アアーッ（落ち行く悲鳴デクレッシェンドで）』

以上ここまでは8年前の投稿です。古参の方は覚えていらっしゃるでしょうか？

ここからは今回の記事です。

レベルアップ（進歩）の度合いですが、8年前はハレルヤの最初の『ハー』の音が取れませんでした。当時より大垣の練習に参加させてもらっていましたが、テノールの人数が少なく自信をもって発声することができませんでした。特にテノール一人の時は、針の筵のような肝試しのような試練の場でした。又、それを逆に楽しんでいる自分もありました。

そして昨年二度目のハレルヤが演目に上がりその練習では自分一人で音が出せたではありませんか！これは私にとって大変意義深いことです。大進歩です。自分を褒めてやりたい。11月号に女性のTさんMさんが同じような体験記を書かれていましたがどうやら私と同時期の入団のようです。気が付きませんでした当時周りのことを気にするほどの余裕もなかったのだと思います。あと少しで10年です一昔です。頑張ります。年末第九頑張ります。ここで8年前の一首を再掲。皇女和宮は政略結婚で落ちゆくわが身を果敢なみながらも将軍家茂を好きになろうと前向きに詩っています。では私も老体に鞭打って

落ちて行く身と知りながらハレルヤの 調べなつかし ヒーシャルレーン

(元歌 落ちていく身と知りながら もみじ葉の 人懐かしく こがれこそすれ 和宮)

12~2月練習予定

練習時間は 18:45~20:45 です(18:30 までに集合しましょう)

月 日	岐 阜	月 日	大 垣
12月 5日(木)	長森コミュニティーセンター	12月 6日(金)	大垣市南地区センター
12月 8日(日)	岐阜・大垣強化練習 長森コミュニティーセンター14:00~17:00		
12月12日(木)	長森コミュニティーセンター	12月13日(金)	大垣市南地区センター
12月15日(日)	飛騨高山千人の第九 本番 飛騨世界生活文化センター (ゲネ 10:00 本番 14:00~16:00)		
12月 19日(木)	岐阜・大垣合同練習 大垣北地区センター18:00~20:00(オケ合わせ)予定		
12月 21日(土)	岐阜・大垣強化練習 長森コミュニティーセンター14:00~17:00(最終確認)		
12月22日(日)	“第九”演奏会本番 長良川国際会議場メインホール(14:00 開演~)		
1月 9日(木)	長森コミュニティーセンター	1月10日(金)	大垣市南地区センター
1月 16日(木)	長森コミュニティーセンター	1月17日(金)	大垣市南地区センター
1月 23日(木)	長森コミュニティーセンター	1月24日(金)	大垣市南地区センター
1月 30日(木)	長森コミュニティーセンター	1月31日(金)	大垣市南地区センター
2月 6日(木)	長森コミュニティーセンター	2月 7日(金)	大垣市南地区センター
2月 13日(木)	長森コミュニティーセンター	2月14日(金)	大垣市南地区センター
2月 20日(木)	長森コミュニティーセンター	2月21日(金)	大垣市南地区センター
2月 27日(木)	長森コミュニティーセンター	2月28日(金)	大垣市南地区センター

音楽家の名言 (モーツァルト)

- 私たちの財産、それは私たちの頭のなかにあります。
- 僕は断言しますが、旅をしない者は(少なくとも芸術や学問に携わる人々の場合は) 実にあわれむべき存在です。望みを持ちましょう。でも、望みは多すぎはいけません。多くのことをなす近道は、一度に一つのことをだけをする事。
- 私は、人の賞賛や避難を全く気に留めない。ただ、自分の感じるままに行うんだ。音楽において最も不可欠で、最も難しく、主要な事柄はテンポだ。
- 「初見で」演奏する技術とは・・・。作品をあるべき正しいテンポで演奏すること。そして、全ての音符、前打音などを、正確にそれにふさわしい表情と味わいをもって演奏し、演奏者自身がその作曲者であるかのように思わせること。
- アダージョのところでのテンポ・ルバートは、左手は正確なテンポで弾き続けるべきです。
- 技巧を駆使していないかのように、演奏が単純で容易に見えるような繊細なテクニックが演奏者には必要だ。

◆レッスンにも役立つ、モーツァルトによる名言

名前のアマデウスには、ラテン語で「神に愛される」の意味があるモーツァルトは、神だけでなく世界中の人々にも愛されている作曲家です。その魅力は謎めいて多岐にわたっていますが、「シンプルな美しさ」「わかりやすく親しみやすいメロディー」「万人を慰め、元気つけてくれるパワー」については誰しもが感じるころではないでしょうか。

生涯 600 曲以上の作品を残したモーツァルトですが、手紙も文書等もたくさん残しており、作品と同じくらい素晴らしい名言があります。演奏者や指揮者としても活躍したモーツァルトの言葉は的確であり、そのままレッスンのアドバイスに使っても適用するものです。なかでも、注目したいのは「旅をしないものは、哀れむべき存在」であると語っていることです。幼少の頃より、ヨーロッパ中を旅したモーツァルトは訪れた各地の風土や文化、人との交流によって見聞を広げ、音楽のスタイルや流行もその中で学び取っていきました。

自身が体感してきただけに強い説得力が感じさせる名言です。

(記事提供:ウィーン岐阜合唱団 テナー 森田 進さん)